

「のだ」の意味と用法に関する研究：中国語との対照を通して

范, 碧琳
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494710>

出版情報：比較社会文化研究. 30, pp.93-107, 2011-09-15. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

「のだ」の意味と用法に関する研究 —中国語との対照を通して—

ハン 范 ビーリン 琳

はじめに

「のだ」は、現代日本語において頻繁に用いられる文末表現形式であり、様々な意味、用法、機能を持っている。現代日本語の文法研究でも、「のだ」の働きについて統一的な理解が得られていない。そのため、中国の学習者は「のだ」を使うべき場合に使わなかったり、使うべきではない場合に使いすぎて不自然な日本語にしまったりすることが非常に多い。中国の学習者にとって、「のだ」はかねてより習得の難しい項目となっている。そこで、中国語の中の「のだ」と類似する文と比較しながら説明するとしたら、学習者はもっと習得しやすいのではないかと考えた。本稿は、日本語と中国語との対照という新たな視点から、「のだ」と中国語の対応関係を解明し、「のだ」の意味と用法を明らかにしていきたいと考える。

本稿は、先行研究を踏まえ、収集した70年代以後の日中、中日対訳小説の用例に基づき、中国語の中の「のだ」と類似する文と対照しながら「のだ」の分析と考察を行っていく。現代日本語の文法研究では「のだ」についての研究は非常に多いが、中国語との対照研究はまだ少ない。そこで、新たな視点から、「のだ」と中国語の対応関係を明らかにすることは中国の日本語学習者にとって有益であり、「のだ」の研究にも非常に有意義であると考えられる。

1. 先行研究と問題点

本稿は主に中国語との対照を通して、「のだ」の意味と用法を考察するものである。従って、「のだ」に関する先行研究、中国語の「是……的」と「是……」に関する先行研究、「のだ」と中国語の対照研究を次のようにそれぞれについて概観する。

1-1 「のだ」に関する先行研究

これまで、「のだ」について様々な研究がなされてきた。次のようにまとめられると思う。

- ・説明説：金田一(1955)、林(1964)、Alfonso(1966)、久野(1973)、山口(1975)、田中(1980)、寺村(1984)、奥田(1990)、田野村(1993)、益岡(1991)(2007)など
- ・既定命題提示説：三上(1953)、佐治(1986b)、国広(1992)など
- ・話者の心的態度表示説：Chinami(1989)、坪根(1994)、小金丸(1990)、野田(1997)、メイナード(1997)など
- ・テキストの結束性表示説：霜崎(1981)
- ・関連性理論：武内(1994)、内田(1998)、近藤(2002)、名嶋(2007)

以下、本稿が主に参考している野田(1997)について概観する。

1-1-1 野田(1997)

「のだ」に関して今日まで様々な研究がなされてきた。「のだ」の文の構造に関しては、一語化した助動詞的な文末形式であるとするのが一般的である。野田(1997)では「のだ」を一語化した助動詞だと考え、[名詞化の機能をもつ「の」+「だ」]という組成のままに近い、プリミティブな性質をもつ「のだ」(スコープの「のだ」と、一語化して変質し、「説明」と言われるようなムードを担う「のだ」(ムードの「のだ」)という立場に立ち、「のだ」の機能を考察している。

野田(1997)では、前接する部分を名詞化するために必須である「のだ」をスコープの「のだ」と呼ぶ。否定などの作用が及ぶ範囲をスコープ、その作用を集中的に受ける部分をフォーカスと呼ぶ。例えば、

(1) 悲しいから泣いたのではない。

(1)' 悲しいから泣いた の ではない。

— || — ↑ ↑ 名詞化 — |

|| | |

|| | _____ 否定のスコープ _____ |

||

|| == == == => 否定のフォーカスになる

(1)では「(話し手)が泣いた」ということは聞き手も知っており、その理由が「悲しいから」であることが特に否定されているので、「悲しいから」が否定のフォーカスだということである。(1)では(1)'のように「悲しいから泣いた」という部分が「の」によって名詞化され、否定のスコープに入ることになる。

スコープの「のだ」は構文的な必要があって用いられるもので、「の」+「だ」という組成のままの機能にかなり近いものであり、文の一部をフォーカスにするという機能を持っているとされている。

(2)走るのは個人だ。国家が走るのではない。

(3)お前に聞いてるんだ。

(4)私に聞いてるんですか？

(1)(2)(3)(4)では、「悲しいから」「国家が」「お前に」「私に」がフォーカスになっている。また、「のだ」の文の一部をフォーカスにするという機能は、「泣いたのは、悲しいからではない」「走るのは個人だ」のような分裂文と共通性がある。そして、スコープの「のだ」は、否定文や質問文ばかりでなく、肯定の平叙文にも用いられると論じている。

否定などのフォーカスについて、野田(1997)では動詞の基本形は「(a) nai」を付加した通常否定の形で、否定のフォーカスになるのは、事態の成立である。事態の成立以外の部分をフォーカスにするときは、「のだ」が必要である。

(5)桜が咲かない

(6)桜が咲くのではない。

(5)では「桜が咲く」という事態の成立が否定のフォーカスになる。何が咲くといった「事態の成立」は否定せず、「桜が」という部分を特に否定のフォーカスにする場合には、(6)の文が適当である。

(7)見たんじゃない。聞いたんだ。(フォーカス：語義<動詞>)

(8)見たんじゃない。見られたんだ。(フォーカス：ボイス)

(9)見るんじゃない。見てるんだ。(フォーカス：アスペクト)

(10)見るんじゃない。見たんだ。(フォーカス：テンス)

(11)私が学生なのではありません。彼が学生なのです。(フォーカス：語義<名詞>)

(12)悲しいんじゃありません。悔しいんです。(フォーカス：語義<形容詞>)

さらに、野田(1997)ではフォーカスになりうる要素についても述べている。「のだ」によって示されるスコープに入りうるのは、格成分、様態・頻度の副詞、制限的修飾成分、動詞、ボイス、アスペクト、否定、テンスと

ムード形式の一部である。これらの要素は、基本的に否定などのフォーカスになりうる。以下がその具体例である。

(13)「旭川って、大きいんですね」

「上川盆地が大きいのさ。ぐるりが山だろう？だから、あの山の下まで旭川みたいに見えるんだ。(後略)」 (三浦綾子『氷点(下)』p.162)

(「が」格がフォーカス)

(14)「いまの言葉は、あんたの命取りになるよ。竹を切って、うっかりそのままにしといたんじゃない。侵入者を殺めるために準備してあった凶器だってことを自分の口から喋ったんだからね」

(宮本輝『避暑地の猫』p.9)

(副詞がフォーカス)

(15)宮沢りえのヌード写真を眺めるために、私たちは新聞を購読しているのではない。

(『朝日新聞』1991.10.26 朝刊 p.5「私の紙面批評」)

(制限的修飾成分がフォーカス)

(16)雨が降るかもしれないのではない。降るに違いないのだ。

(ムードがフォーカス)

野田(1997)では、ムードの「のだ」は、文を名詞文に準じる形にすることによって、話し手の心の態度を表すものである。ムードの「のだ」は、対事的ムードのみ担うか、対人的ムードも担うかという軸と、事態Qを状況や先行文脈Pと関係づけているか、関係づけていないかという軸とで四つに分類するのが適当であると主張している。

対事的ムードの「のだ」というのは、話し手が、それまで認識していなかった事態Qを発話時において把握したことを示すものであり、必ずしも聞き手を必要としない。関係づけの対事的「のだ」は、状況や先行文脈Pの事情、意味としてQを把握するときに用いられるとしている。非関係づけの対事的「のだ」は、Qを既定の事態として把握するときに用いられるとしている。例(17)は前者、(18)は後者に分類されている。

(17)山田さんが来ないなあ。きっと用事があるんだ。

(18)そうか、このスイッチを押すんだ。

対人的ムードの「のだ」は、聞き手は認識していないが話し手は認識している既定の事態Qを提示し、それを聞き手に認識させようという話し手の心の態度を表す。告白、教示、強調といったニュアンスを帯びることもあると述べている。関係づけの対人的「のだ」は、状況や先行文脈Pの事情、意味としてQを提示し、それを聞き手に認識させようとするときに用いられる。いわゆる説明を表す「のだ」をはじめとして、用法には広がりがある。非関係づけの対人的「のだ」は、それを聞き手に認

識させようとするときに用いられる。Qが既定の事態であることをことさらに示す場合や、教示的な場合などに用いられると述べている。例(19)は前者、(20)は後者に分類されている。

(19)「咲かないよ。旅行に行ったんだ。」
(吉本ばなな『NP』p.214)

(20) 梅若 アンタはねえ、卒だの厳しい階級だのに口先だけで惚れてんだよ。自分は楽なとこに置いといて、他人が厳しい階級の中で頑張ってるのを見物するのが好きだけなんだよ。

(内館牧子『ひらり』p.374)

1-2 「是……的」と「是……」に関する先行研究

「のだ」は、名詞化の機能をもつ準体助詞の「の」に「だ」が後接し、それが一語化したものだと扱われてきた。中国語の名詞句化接尾辞の“的”の機能は「の」の機能にきわめて似ている。また、「是……的」の文と「是……」の文は「のだ」との共通点が多いため、「のだ」と中国語との対照研究をするには、「是……的」と「是……」に関する先行研究を詳しく考察していく必要がある。

1-2-1 「是……的」に関する先行研究

1-2-1-1 小野(2001)

小野(2001)は、“的”構文の基本機能から“是……的”文を考察している。“是……的”文における“的”は「モノ」を代替するものであり、かつ、それは文の成立にとって不可欠な成分であると述べている。「連体修飾構造」“X的N”(例：我的书(私の本)・他买的书(彼が買った本))において、まず特定の「事物(=もの)」の存在が認知されており、その「もの」に対して、例えば、所有者・性質・存在に關与する具体的な行為などの情報を“X的”で付加して表出した形式といえる。基本的には、「はじめにモノ有り」であり、「モノ」が眼前にある、あるいは既に話題に上っているような場合、“N”は省略できると述べている。例としては、

(21) 这是我的(これは私の)
这都是他买的(これは全部彼が買った)。

“的”の前が動詞である“V的N”において、“N”は既知かつ特定のものであり、“V”は已然の行為であるということであると主張している。例えば、

(22) 他穿的衣服(彼が着た服)。

また、“是”は文に「添加」された「語気副詞」であり、主要述語動詞ではないと分析され、“是”が挿入されることによって、文の一部を「焦点化」と述べている。例えば、

(23) 你是在哪儿买的这本书？(どこでこの本を買ったんですか？)

我是在王府井买的这本书。(王府井で買ったのです。)

この例においては、「焦点化」を表す“是”を使用することによって、“在王府井”の部分が強調されるようになっている。

さらに、“是……的”文が未然の行為を表すことができないのは、“的”の「モノ化機能」が「特定のモノの存在」と密接に關係しているためであると述べている。

1-2-1-2 木村(2002)

木村(2002)は、“的”の事物限定から動作限定への機能拡張の立場に立ち、“的”構文の構文的意味は、すでに実現したことが前提とされている特定の動作行為に対して、その動作行為に關与する何らかの關与項を基準に区分的限定を加え、当該動作(行為)の属性を措定しようとするものであると指摘している。また、關与項とは、具体的には、動作者、受動者、地点、時点、道具、手段、受給者、共同者等々を指すと述べている。

“的”構文の性質については、“的”構文が、動作行為に關わる何らかの關与項を基準として既然の動作行為に区分的限定を加える構文であるとすれば、この種の構文が必ず一つの關与項を新情報として焦点化し、動作行為そのものの実現を旧情報として扱うと記述している。例えば、次のような例がある。

(24) 他是去年年底买的那辆自行车。(彼が去年の末ごろあの自転車を買ったのだ。)

さらに、“的”構文の述語動詞は“了、着、过”いずれのアスペクト接尾辞とも共起しないことと、“的”構文の述語動詞は数量表現と様態表現および原因表現と共起しないということも指摘している。

1-2-2 「是……」に関する先行研究

1-2-2-1 朱德熙(1982)

朱德熙(1982)によれば、動詞の“是”の後ろに来る目的語は体詞性成分であってもよいし、述詞性成分であってもよいという。目的語が述詞である場合はしばしば対比を表す。また、“是+N+V”という種の構造では、本来の主語が“是”の目的語になっているため、かたちの上では主語のない文に変わっている。この種の文構造を用いるのは、Nを強調して、それを文の意味的な中心点(焦点)にするためである。

1-2-2-2 大河内康憲(1975)

大河内康憲(1975)によれば、“是”は話し手の主体的

態度の表明であり、ムードであり、その語彙的形式による表明と理解しても大きな誤りはない。ある種の副詞との不可欠な共起といい、文頭の副詞との強調など、いずれも話者の主体性の表明、主張の必要を補うものと見られている。

1-3 「のだ」と中国語の対照研究

1-3-1 杉村(1980)(1982)

杉村(1980)(1982)では形式的に比較対照したとき、「是……的」は「のだ」と意外な程の平行関係をみせるといふ。「是……的」の機能については、「状況解說的用法が余り発達しておらず、もっぱら特定成分の指定強調という面で活躍する」と述べている。また状況解說的「のだ」の中国語訳としては、「翻訳ものなどに当たって、見ても、状況解說的「のだ」と「是……的」は意外なほど対応しない」と述べている。“是……的”よりも、「是」も「的」も用いない文(無標識の文)が最もよく対応すると指摘している。

1-3-2 野田(1997)

野田(1997)は杉村(1980)(1982)の「状況解說的」な「のだ」の中国語訳としては、「是……的」よりも、「是」も「的」も用いない文が最もよく対応する」という指摘を受けて、ムードの「のだ」に対応する中国語の形式はなく、スコープの「のだ」には“是……的”が対応すると述べている。例えば、

(25) 男のくせに私、めっちゃめっちゃ泣いちゃってたから、くそ寒いのにタクシーに乗れないのよ。男ってもういやだってその時、初めて思ったのかもね。

(吉本ばなな『満月』p.127)

我哭了，一个大男人呜呜地哭了，严寒中，没有勇气乘出租车。恐怕，我是在那时候开始讨厌做男人的吧！

(叶伟然(訳)『我爱厨房』p.135)

(26)「帰る？」雄一がびっくりしたように言った。「どこに？どこから来たんだ？」

(吉本ばなな『満月』p.157)

“走？”雄一吃了一惊似的。“到哪里去？你是从哪里来的？”

(叶伟然(訳)『我爱厨房』p.167)

また、スコープの「のだ」には「是……的」が対応するという点についてはもう少し考察が必要だと指摘し、スコープの「のだ」がある例では「是……」だけに対応していると述べている。例えば、

(27) 彼はいつもその雰囲気や表情にある種の透明感

を持っていた。だから、こんなにはかなく心もとなく感じるのだろうと私はずっと思っていたが、もしそれが予感だったとしたらなんと切ないことであろうか。

(吉本ばなな『ムーンライト・シャドウ』p.127)

在这种气氛和表情之中，他会给人一种透明的感觉。就是这种透明感，令我一直担心、不安。假若，这就是一种预感的话，那是多么无奈啊。

(叶伟然(訳)『我爱厨房』p.180)

(28) 何が悲しいのでもなく、私はいろんなことにただ涙したかった気がした。

(吉本ばなな『キッチン』p.57)

我并不是因为悲伤而这样嚎啕大哭，只是百感交集，不大哭一场，心里不舒服而已。

(叶伟然(訳)『我爱厨房』p.57)

1-3-3 井上(2003)

井上(2003)は、「のだ」文と“的”構文の対照研究をして、この二つの構文の類似点と相違点を分析したうえで、両文の基本的相違は「二つの事態の関係づけ」と「一つの事態の内容限定」であるということ指摘し、この相違の背景と相違点に関連する「テンスの有無」の問題に触れている。類似点は三つあると述べている。

[1] いずれも「名詞化」と関係する形式である。

[2] いずれも「既定事項の存在を受けて、それに対する解説を述べる」という性質を有する。

[3] いずれも述語以外の要素を主張の焦点とする。

また、「のだ」文と“的”構文は、本質的な部分で異なる四つの性質を持つと述べている。

[1] “的”構文は、アスペクト接辞や否定辞“没”を伴わない、動量語や様態描写的な連用修飾語が生じにくいなど、文内部に生起可能な要素にかなりの制限がある。「のだ」文にこのような制限はない。

[2] 「のだ」文は、程度の差はあれ「実情の披瀝」というニュアンスを有するが、“的”構文にはそのようなニュアンスがないことも多い

[3] 原因・理由を問う文は、日本語では通常「のだ」文になるが、中国語では“的”構文を用いる必要はない。

[4] “的”構文の解説対象は「既然の事態」に限られるが、「のだ」文の解説対象は文脈上「既定事項」扱いされる事態であれば、既然の事態でも既定の予定でもよい。

1-4 先行研究の問題点と本稿の位置づけ

現代日本語の文法研究では「のだ」の研究は非常に多

いが、中国語との対照研究はまだ少ない。中国語との対照研究の中にはまだ不十分な点と不確かな点がたくさんある。「のだ」と「是……的」の対照研究は行われたが、その中でも未解決の問題も残っている。例えば、杉村(1980)(1982)と野田(1997)では、一体どのような条件で「のだ」が「是……的」と対応するか、どのような状況で「是……」と対応するかについてはまだ明らかにされていない。また、「のだ」と「是……」の対照研究はほとんどないため、この部分についても明らかにする必要がある。さらに、いままで対照研究をしてない「是」も「的」も用いない文(無標識の文)について詳しく考察する必要もある。

本稿は、先行研究を踏まえ、野田(1997)のスコープの「のだ」とムードの「のだ」の分類を考察の前提に取り入れ、野田(1997)の分析では不十分なスコープの「のだ」と「是……的」、「是……」の対応関係を解明すると共に、ムードの「のだ」と「是」も「的」も用いない文(無標識の文)の対応関係も明らかにする。

2. 研究方法とデータの数量

2-1 データの収集と分類、分析方法

本稿は主に70年代以後の日中、中日対訳の小説、映画、ドラマの脚本から、大量の対応例を探し出し、基本データとする。小説と対応の訳本などを用いるのは、作家、脚本家や翻訳家は製作の際に数多くの推敲を重ねて、最も適した文を用いていると考えられるからである。データの分類方法としては、まず、日中対応の例をスコープの「のだ」とムードの「のだ」に分けて分類する。次に、スコープの「のだ」を対応する中国語「是……的」、「是……」、「是」も「的」も用いない文により分類し、ムードの「のだ」を用法と機能別に分類する。最後に、中日対応の例については「是……的」、「是……」、「是」も「的」も用いない文に分類する。

2-2 データの数量

対訳の小説、映画、ドラマの脚本から、「のだ」の例を2328例を収集した。その中、スコープの「のだ」が405例であるのに対して、ムードの「のだ」の数が非常に多く、1923例がある。収集した405例のスコープの「のだ」の中、「是……的」と対応する例は116、「是……」と対応する例は253、「是……的」とも「是……」とも対応していない無標識の例は36がある。ムードの「のだ」は殆ど無標識の文になり、僅か一部分が「是……的」、「是……」とその他の形式に対応している。ここで区別するために、スコープの「のだ」と対応する「是……的」と「是……」を「是……的(一)」と「是……(一)」と呼ぶ。ムードの「のだ」と対応する「是……的」と「是……」を「是……的(二)」と「是……(二)」と呼ぶ。

……」を「是……的(一)」と「是……(一)」と呼ぶ。ムードの「のだ」と対応する「是……的」と「是……」を「是……的(二)」と「是……(二)」と呼ぶ。

2-3 データの分析方法

まず、スコープの「のだ」とスコープの「のだ」が対応する中国語「是……的」、「是……」の例を分析、検討した上で、帰納的にスコープの「のだ」と「是……的」、「是……」の対応する条件をまとめる。次に、中国語の中の「是……的」、「是……」以外のスコープの「のだ」と対応する例を分析し、その特徴を明らかにする。最後に、用法と機能別に分類されたムードの「のだ」と対応する中国語を分析し、対応条件をまとめる。

3. スコープの「のだ」と中国語の対照

3-1 スコープの「のだ」と「是……的(一)」

スコープの「のだ」は、文の一部をフォーカスにするという機能を持っている。「是……的(一)」も述語以外の要素を主張の焦点とする機能を持っている。この共通点があるからこそ、スコープの「のだ」の一部分が「是……的(一)」と対応しているのではないかと考えられる。

野田(1997)によると、「の(だ)」を用いない文で否定などのフォーカスになるのは述語全体ではなく、事態の成立である。事態の成立以外の部分をフォーカスにするときには、「の(だ)」が必要である。「のだ」によって示されるスコープに入りうるのは、格成分、様態・頻度の副詞、制限的修飾成分、動詞、ボイス、アスペクト、否定、テンスとムード形式の一部である。これらの要素は、基本的に否定などのフォーカスになりうる。また、動詞文に動詞以外の成分がある場合は、そこがフォーカスになる。そのような成分がない場合は、動詞の語幹がフォーカスになる。述語以外の成分が複数表れることもある。スコープの「の(だ)」でくくられた中に、動詞にとって必須の成分と、そうではない成分が存在するときには、必須ではない成分のほうがフォーカスになるのが普通である。つまり、動詞との統語的結びつきがより弱いものがフォーカスになりやすい。以上の記述を、本稿の日本語の用例のフォーカスの位置を判断する基準とする。

木村英樹(2002)によると、「是……的」ではすでに実現したことが前提とされている特定の動作行為に対して、その動作行為に関与する何らかの関与項(動作者、受動者、地点、時点、道具、手段、受給者、共同者など)を基準に区分的限定を加え、当該動作(行為)の属性を措定しようとする機能があるという。以上の区分基準を本稿の中国語の用例の焦点の位置を判断する基準とする。

まず野田(1997)の例を分析してみる。

(29) 男のくせに私、めっちゃめっちゃ泣いちゃってたから、くそ寒いのにタクシーに乗れないのよ。男ってもういやだってその時、初めて思ったのかもね。

(吉本ばなな『満月』p.127)

(過去のテンス、「その時」にフォーカスを置く)

我哭了, 一个大男人呜呜地哭了, 严寒中, 没有勇气乘计程车。恐怕, 我是在那时候开始讨厌做男人的吧!

(叶伟然(訳)『我爱厨房』p.135)

(時点を基準に「讨厌(思った)」という動作に区分的限定を加える)

例(29)では、動詞以外の成分は「男ってもういやだ」「その時」「初めて」という三つの成分があり、「その時」は「思った」との統語的結びつきがより弱いので、文のフォーカスになると判断する。また「のだ」の前接する部分は「思った」という過去のテンスであるという特徴もある。対訳の中国語の例では、すでに実現した「讨厌」という動作に「時点」を表す「那时候」を基準に区分的限定を加え、「讨厌」という動作(行為)の発生時間を措定しようとする。日本語の例と同じ、「那时候」が文の焦点になる。

(30)「帰る？」雄一がびっくりしたように言った。「どこに？どこから来たんだ？」

(吉本ばなな『満月』p.157)

(過去のテンス、「どこ」にフォーカスを置く)

“走？”雄一吃了一惊似的。“到哪里去？你是从哪里来的？”

(叶伟然(訳)『我爱厨房』p.167)

(地点を基準に「来(来た)」という動作に区分的限定を加える)

例(30)では、動詞以外の成分は「どこから」であり、それが文のフォーカスになると判断する。さらに、「のだ」の前接する部分は「来た」という過去のテンスであるという特徴もある。対訳の中国語の例では、すでに実現した「来」という動作に「地点」を表す「哪里」を基準に区分的限定を加え、「来」という動作(行為)の発生場所を措定しようとする。日本語の例と同じ、「哪里」が文の焦点になる。

小説から収集した例をもう少し考察してみる。

(31)それはまるで夜の闇の中にそびえたつモニュメントのようだった。そしてそのモニュメントは僕ひとりのためにそびえていたのだ。

(村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』p.31)

(過去の状態、「僕ひとり」にフォーカスを置く)

宛如夜空中耸立的纪念碑, 而且是为我个人耸立

的。

(林少华(訳)『舞!舞!舞!』p.18)

(受給者を基準に「耸立(そびえていた)」という動作に区分的限定を加える)

例(31)では、動詞以外の成分は「僕ひとりのために」であり、「のだ」を使うことにより、それが文のフォーカスになっている。また、「のだ」の前接する部分は「そびえていた」という過去の状態であるという特徴も観察できる。対訳の中国語の例では、既然の事態として存在している「耸立」という動作に「受給者」を表す「为我个人」を基準に区分的限定を加え、「来」という動作(行為)の発生を目的を措定しようとする。日本語の例と同じ、「为我个人」が文の焦点になる。

中国語の「是……的」とスコープの「のだ」と対応する例も分析してみる。

(32)是呀, 一夜黄纸一夜泪。连年的战乱, 天灾又是那样的预繁, 人是怎么活过来的呢?

(李佩甫『羊的门』p.5)

(手段を基準に「活过来(生き延びてきた)」という動作に区分的限定を加える)

そうなのだ。一枚のぼんだ紙には一枚分の涙が。戦乱は連なり、天災はかくも頻発し、人はどうやって生き延びてきたのだろうか。

(永田小絵、辻康武(訳)『羊の門』p.4)

(過去のテンス、「どうやって」にフォーカスを置く)

中国語の例では、すでに実現した「活过来」という動作に「手段」を表す「怎么」を基準に区分的限定を加え、「活过来」という行為を実現した手段を措定しようとする。従って、「怎么」が文の焦点になる。日本語の例では、述語になる動詞以外の成分は「どうやって」であり、「のだ」を使うことによって、「どうやって」が文のフォーカスになる。さらに、「のだ」の前接する部分は「生き延びてきた」という過去のテンスであるという特徴がある。両言語とも「手段」にフォーカスが置かれている。

データを分析した結果、スコープの「のだ」と「是……的(一)」が対応するとき、以下の二つの共通点があることが明らかになった。

[1]「のだ」に前接する部分がほとんど過去のテンスである。中国語のほうはすでに実現したことが前提とされている動作がほとんどである。どちらでも動詞文になっている。

[2]スコープの「のだ」を用いることにより、事態の成立以外の部分が文のフォーカスになる。格成分、様態・頻度の副詞、制限的修飾成分、動詞、ボイス、アスペクト、否定、テンスとムード形式など

のフォーカスになりうる成分は動作者、受動者、地点、時点、道具、手段、受給者、共同者などとして存在している。「是……的」構文を用いることによって、すでに実現したことが前提とされている特定の動作行為に対して、動作者、受動者、地点、時点、道具、手段、受給者、共同者などを基準に動作を区分する。従って、動作者、受動者、地点、時点、道具、手段、受給者、共同者などが文の焦点になる。

以下は述語になる動詞以外の成分：動作者、受動者、地点、時点、手段、受給者などにより分類した「のだ」と「是……的」の中目、日中対応例である。

動作者がフォーカスになる例：

(33)“唔，原来这样！是谁教你的，那—你会有崇敬的人吧？”

(韩寒『三重门』p.91)

(動作者を表す「誰」がフォーカスになっている)
「ああ、そういうことか！誰に教わったの？ていうか—君には尊敬する人はいるのかい？」

(平坂仁志(訳)『上海ビート』p.113)

(動作者を表す「誰」がフォーカスになっている)

(34)私はそれを見ていたら、自分の祖母への愛がこの人よりも少ないのでは、と思わず考えてしまった。そのくらい彼は悲しそうに見えた。

そして、ハンカチで顔を押さえながら、「何か手伝わしてください。」というので、その後、(彼に)いろいろ手伝ってもらったのだ。

(吉本ばなな『キッチン』p.11)

(省略された動作者の「彼」がフォーカスになっている)

他看起来是那么悲伤，都不禁使我暗自惭愧，自己对祖母的爱是不是不及眼前的这个人？

上完香，他用手帕捂着脸，对我说：“让我来帮帮忙吧。”就这样，之后很多事都是他帮我料理的。

(李萍(訳)『厨房』p.6)

(動作者を表す「他」がフォーカスになっている)

受動者がフォーカスになる例：

(35)尽管编辑都是钟情于文字的，但四个人要编好一份发行量四千分的报纸，好比要四只猴子一下吃掉四吨桃子。

(韩寒『三重门』p.81)

(受動者の「文字」がフォーカスになっている)

編集者はみんな仕事が大好きなのだが、たった四人で発行部数四千部の新聞を編集するのは、四匹のサルが数時間で四トンの桃を食べ尽くすようなものである。

(平坂仁志(訳)『上海ビート』p.100)

(受動者を表す「仕事」がフォーカスになっている)

地点がフォーカスになる例：

(36)「今、ここに着いたばかり。けっこう遠くから来たの。」

旅人特有のきらきら高揚した瞳で彼女は言って、川面を見つめた。

(吉本ばなな『満月』p.172)

(地点を表す「遠く」がフォーカスになっている)

“我刚到这里，是从很远的地方来的。”熠熠生辉的双眸中透出游人所特有的兴奋，说完，她凝望着河面。

(李萍(訳)『厨房』p.102)

(地点を表す「很远的地方」がフォーカスになっている)

時点がフォーカスになる例：

(37)「雄一、これ丸々さっき飲んじゃったの？」

彼はソファーにあおむけになったまま、セロリをぼりぼり食べながら、うん、と言った。

(吉本ばなな『キッチン』p.96)

(時点を表す「さっき」がフォーカスになっている)

我惊讶地问他：“雄一，这一整瓶都是你刚才喝光的？”

他仰面躺在沙发上，咯吱咯吱嚼着西芹“嗯”了一声。

(李萍(訳)『厨房』p.56)

(時点を表す「刚才」がフォーカスになっている)

手段がフォーカスになる例：

(38)「ところで。」私は言った。「本当はどうやって番号がわかったの？」

(吉本ばなな『満月』p.192)

(手段を表す「どうやって」がフォーカスになっている)

“不过”，我问，“你到底是怎么知道我的号码的？”

(李萍(訳)『月影』p.113)

(手段を表す「怎么」がフォーカスになっている)

(39)小谢惊喜道：“哟，说起来咱们还是校友呢，我也是武大毕业的”

呼国庆摆摆手，调侃说：“不敢，不敢。我那不算，我那不算，你们才是正牌。我是瞎蒙的，拿钱买的。”

(李佩甫『羊的门』p.28)

(手段を表す「拿钱」がフォーカスになっている)

麗娟は驚きと喜びを入り混ぜていった。「あら、じゃ私達は同窓生ね、私も武漢大よ」呼国庆は手を振りながら、自嘲するようにいった。「とんでもない、とんでもない、おれのはちがうが、あなたのはほんものですよ。おれはモグリのやつで、

金で買ったんだ。」

(永田小絵、辻康武(訳)『羊の門』 pp.25~26)
(手段を表す「金で」がフォーカスになっている)

3-2 スコープの「のだ」と「是……(一)」

動詞の“是”の後ろに来る目的語は、体詞性成分であってもよいし、述詞性成分であってもよい。目的語が述詞である場合は、しばしば対比を表す。野田(1997)によれば、スコープの「のだ」の文と名詞文は共通した性質をもっている。スコープの「のだ」を用いることによって、動詞文などを名詞文と同じような形にし、名詞文と同様の対比性をもたらすことができる。具体的には、否定文の場合は、「の」によって名詞化した部分Qが不適切であり、対立するQ'なら適切であることを示す。肯定文の場合はその反対になると述べている。

また、“是+N+V”という種の文構造を用いることで、Nを強調して、それを文の意味的な中心点(焦点)にすることができる。「是……(一)」文の対比を表す機能とNを文の意味的な中心点(焦点)にする機能はスコープの「のだ」の文の対比性と文の一部をフォーカスにするという機能と共通しているので、スコープの「のだ」の一部は「是……(一)」と共通しているのではないかと考えられる。

まず、野田(1997)の例から分析してみる。

(40)彼はいつもその雰囲気や表情にある種の透明感を持っていた。だから、こんなにはかなく心もとなく感じるのだろうと私はずっと思っていたが、もしそれが予感だったとしたらなんと切ないことであろうか。

(吉本ばなな『ムーンライト・シャドウ』p.127)
(現在形 「だから」にフォーカスを置く)

在这种气氛和表情之中，他会给人一种透明的感觉。就是这种透明感，令我一直担心、不安。假若，这就是一种预感的话，那是多么无奈啊。

(叶伟然(訳)『我爱厨房』p.180)

(“是+N+V”構造、体詞性成分目的語の「透明感」をフォーカスにする)

例(40)では、述語になる動詞以外の成分は「だから」、「こんなに」、「はかなく心もとなく」という三つの成分があり、「だから」は「感じる」との統語的結びつきがより弱いので、文のフォーカスになると判断される。「だから」は「この透明感があるから」と理解されるので、そこにフォーカスが置かれる。また「のだ」に前接する部分は「感じる」という現在形の動詞であるという特徴もある。中国語の訳文では、「透明感」が“是+N+V”構造(是+透明感+令我担心、不安)のNになり、文の意

味的な中心点(焦点)になる。

(41)何が悲しいのでもなく、私はいろんなことにただ涙したかった気がした。

(吉本ばなな『キッチン』p.57)

(様態描写の形容詞 語義にフォーカスを置く)

我并不是因为悲伤而这样嚎啕大哭,只是百感交集,不大哭一场,心里不舒服而已。

(叶伟然(訳)『我爱厨房』p.57)

(述詞性成分目的語 対比を表す)

例(41)では、「何が悲しい」という全体的な語義が文のフォーカスになっている。「のだ」の前接する部分は様態を現す形容詞「悲しい」であるという特徴がある。中国語の訳文では、「悲しい」という述詞性成分が“是”の目的語になっているため、文は対比(不是……只是……)を表している。

小説から収集した例をもう少し考察してみる。

(42)「(前略)怖かったわ。いや、怖いなんてものじゃないわね。きゆうっと胃がせりあがってきてね、喉の近くまで来ているのよ。そして体じゅうから汗が吹き出すの。嫌な臭いのする冷たい汗。寒気。まるで肌の上を蛇が這っているみたい。エレベーターはまだこないの。七階……八階……九階……。そして足音が近づいてくる」

(村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』p.94)

(アスペクト接辞 主格にフォーカスを置く)

“(前略)真怕人，不，也不是什么怕，是胃一下一下地往上蹿，一直蹿到嗓子眼。而且浑身冒汗，冒冷汗，味儿不好闻，凉飕飕的，活像蛇在皮肤上来爬去。电梯还是没

上来，七楼……八楼……九楼脚步声却越来越近。”

(林少华(訳)『舞!舞!舞!』p.62)

(“是+N+V”構造 体詞性成分目的語「胃」にフォーカスを置く)

例(42)では、述語になる動詞以外の成分「胃」が文のフォーカスになると判断される。また、「のだ」の前接する部分は「来ている」というアスペクト接辞であるという特徴もある。中国語の訳文では、「胃」が“是+N+V”構造(是+胃+蹿……)のNになり、文の意味的な中心点(焦点)になる。

(43)人は状況や外からの力に屈するんじゃない、内から負けがこんでくるんだわ。と心の底から私は思った。

(吉本ばなな『満月』p.140)

(現在形 それぞれ受動者、地点にフォーカスを置く)

我痛切感到，人不是屈服于环境或外力，而是被自

己の内心一再的压垮。

(李萍(訳)『満月』p.82)

(述詞性成分目的語 対比を表す)

例(43)では、述語になる動詞以外の成分の「状況や外からの力」、「内から」が文のフォーカスになると判断される。また、「のだ」の前接する部分は「屈する」「こんでくる」という動詞の現在形であるという特徴がある。中国語の訳文では述詞性成分「屈服」「被压垮」が“是”の目的語になっており、文は対比を表している。

(44)「あなたといると気づまりだとかそういうじゃないのよ。ただ一緒にいるとね、時々空気がすうっと薄くなってくるのよ。まるで月にいるみたいに。」

(村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』p.19)

(現在形 語義全体にフォーカスを置く)

不是说和你在一起感到心烦，只是恍惚觉得空气变得稀薄起来，简直像在月球上似的。

(林少华(訳)『舞！舞！舞！』p.11)

(述詞性成分目的語 対比を表す)

例(44)では、「気づまり」、「空気がすうっと薄くなってくる」という語義全体が文のフォーカスになっている。また、「のだ」の前接する部分は「そういうじゃない」という動詞の否定形と「なってくる」という動詞の現在形であるという特徴がある。中国語の訳文では、「感到(感じる)」「觉得(思う)」という述詞性成分が“是”の目的語になっているため、文は対比(不是……只是……)を表している。

以上の例から考えると、スコープの「のだ」と「是……(一)」が対応するとき、以下の二つの特徴が存在している。

[1]「のだ」の前接する部分は動詞の現在形、動詞の否定形、アスペクト接辞、様態を表す形容詞などである。

中国語のほうでは全部現在の状態になっている。

[2]スコープの「のだ」を用いることにより、事態の成立以外の部分が文のフォーカスになる。動詞文だけでなく、形容詞文も現れている。文のフォーカスになるのは動詞文の述語以外の動作者、受動者、地点、時点だけでなく、動詞文や形容詞文の語義全体も文のフォーカスになる。中国語のほうでは、「是+N+V」構造になるものと対比を表すものが多い。

3-3 スコープの「のだ」と「是」も「的」も用いない文(無標識の文)

スコープの「のだ」が「是……的」と「是……」のどちらにも対応していない例を考察すると、無標識になった原因は言語の習慣、日本語と中国語の品詞の違い、表現形

式の違いにあると考えられる。また、対応することもできるが、翻訳の立場から見て、訳者が訳文の適切性、統一性を考慮し、一番ふさわしい訳文を選ぶということも原因の一つである。

(45)「どうしてそんなに日焼けしてるの？」

(村上春樹『ノルウェイの森』p.96)

“怎么晒得这么黑？”

(林少华(訳)『挪威的森林』p.56)

日本語では「どうして」を使って原因などを聞くときに、スコープの「のだ」は必須であるが、中国語では、「是……的」「是……」構文の焦点の中に「理由」を表す「怎么」が入れない。同じ「怎么」でも、方式、手段を表す「怎么」は「是……的」構文に入れる。

(46)「大丈夫だよ、君が悪いんじゃない」と僕は言った。

「たぶん僕が偏狭すぎるんだ。公平に見れば君はとてもよくやってる。気にしなくていい。」

(村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』p.212)

“不要紧的，也怪不得你。”我说，“大概是由于我过于偏激。公平地看来，你也做得蛮好。别往心里去。”

(林少华(訳)『舞！舞！舞！』pp.385-386)

例(46)の「君が悪いんじゃない」は「不是你不好」に訳しても正しいが、訳文の適切性から考えると、やはり「也怪不得你」がよりふさわしい訳文である。

4. ムードの「のだ」と中国語の対照

ムードの「のだ」は、話し手の心の態度を表す形式である。ムードの「のだ」を中国語と対照するとき、対応する文にはいろいろな種類があるが、ほとんどのムードの「のだ」は「是」も「的」も用いない文(無標識の文)になる。わずか一部分が「是……的」、「是……」とその他の形式に対応している。

先行研究を踏まえ、本稿は、聞き手がいるかどうかによって、ムードの「のだ」を大まかに二分する。即ち、必ず聞き手を必要とするタイプと必ず聞き手を必要としないタイプに分ける。

4-1 必ず聞き手を必要とするムードの「のだ」

必ず聞き手を必要とするムードの「のだ」の基本的な用法は、話し手と聞き手がある知識・状況を共有していて、それに関連することで、話し手と聞き手のうち一方だけが知っている付加的な情報があるという場合、あるいは、話し手と聞き手のうち一方だけが認識している事態があるという場合に、その一方だけが知っている付加的な情報、あるいは事態を他方に提示することである。

意味と機能別に説明、強調、そのほか(前置き、教示、確認、告白、換言、決意、命令)にわけることができる。

説明の例

(47)それで私、誰かが蠟燭を見つけて、それをつけてるんだなと思ったわけ。それで、とにかくそこに行ってみようと思ったの。」

(村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』p.92)

“我估计是有人找到了蜡烛点起来，便打算上前看看。”

(林少华(訳)『舞！舞！舞！』p.61)

(48)呼国庆说：“你多少透一点，也让我心里有个数。”

根宝想了想说：“按说，我是一个字都不能说的。(後略)”

(李佩甫『羊的门』p.139)

「少し聞かせてくれると私の気持ちもまとまるんだが」

根宝は考え考え答える。

「本来なら一言も言えないんです。(後略)」

(永田小絵、辻康武(訳)『羊の門』pp.155-156)

強調の例

(49)彼女は少し考えてから首を振った。「ないと思う。でもね、私は感じるのよ。あそこには何か普通じゃないものがあるって。(後略)」

(村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』p.96)

她沉吟片刻，摇摇头说：“我想没有。但感觉是有的，总觉得宾馆里有什么东西不同寻常，(後略)”

(林少华(訳)『舞！舞！舞！』p.63)

(50)「どっちの方に？」

「右」と言ってから、彼女は右手を上げて、それが間違いなく右であったことを確かめた。「そう、右のほうに進んだのよ。ゆっくりと。(後略)」

(村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』p.92)

“朝哪边？”

“右边。”说罢，她抬起右手，表示不会记错。“是的，是向右边走，一步一步地。(後略)”

(林少华(訳)『舞！舞！舞！』p.61)

前置きの例

(51)「申し訳ないんですが、レンタカーの相談してるみたいなふりをしてください」と彼女は言った。そして横目でちらりとフロントの方を見た。

(村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』p.80)

“对不起，请做出商量借东西的样子。”说着，她斜眼觑了一下服务台。

(林少华(訳)『舞！舞！舞！』p.53)

教示の例

(52)“男人如果总是孤身一人生活，就会变成那种不修

边幅的样子的。”

(韩寒『三重门』p.62)

「男の人がいつまでも独身者でいると、ああいう不精な格好になるんですよ。」

(平坂仁志(訳)『上海ビート』p.76)

(53)“你应该自己决定自己的人生。”

(韩寒『三重门』p.123)

「貴方が自分で自分の生き方を考えていくしかないのだから。」

(平坂仁志(訳)『上海ビート』p.140)

確認の例

(54)この薬一日2回飲んでいいんですね。／这药一天吃两次对吧。

(55)「私。」私はかなりそっと言った。「本当にここで眠っていいの？」

「うん」

彼はきっぱり言った。

(吉本ばなな『キッチン』pp.24-25)

“我，”我低低地问他，“我真的可以睡在这里吗”

“嗯。”他回答得很干脆。

(李萍(訳)『满月』p.13)

換言の例

(56)A:大学行けるの？

B:だって無試験だもん

A:へえ、じゃ3年も遊んでいられるんだ。

(野田1997:85)

A:能进大学吗？

B:都不用考试就能进

A:嘿，那你就能玩他3年了。

命令の例

(57)リカ、永尾を覗き込んで——

リカ 「おー、働いてます働いてます、まるで失恋の痛手を仕事で誤魔化すかのよう」

永尾 「——」

リカ 「働け働け、働くんだ、永尾完治！」

永尾 「——」

リカ 「フられちゃった悲しみを、破れたハートをエネルギーにして働くんだ」

永尾、手をとめる。

(柴門ふみ、坂元祐二『東京ラブストーリー』p.45)

莉香偷看永尾——

莉香：“哎呀，在工作在工作呢，像是要用工作来做来掩盖失恋的悲痛”

永尾：——

莉香：“工作工作，快工作，永尾完治！”

永尾：———

莉香：“把被甩的悲伤，破碎的心化作动力去工作”
永尾停下了手里的活。

4-2 聞き手を必要としないムードの「のだ」

必ず聞き手を必要としないムードの「のだ」では、情報を相手に提供するというより、独り言、自分に言い聞かせる感じが強い。聞き手がいてもいなくても発話に影響を及ぼさない。意味と機能別に想起、発見、再確認にわけられる。これらの用法はほとんど「是」も「的」も用いない文に対応する。

想起の例

(58) そうだ、今日は休みなんだ。／对了，今天休息啊。

発見の例

(59) その時、襖が開いて、入ってくる三上。一同、歓声。

さとみ「———」

さらに入ってくる、リカ。

リカ「え、こんなに一杯いるんだ——」

(柴門ふみ、坂元祐二『東京ラブストーリー』p.12)

正在这时，拉门打开，三上进来。大家一齐欢呼。

里美：“———”

莉香接着进来。

莉香：“欸，有这么多人啊”

再認識の例

(60) (ビールを飲んで)

「うまいんだな、これが」

(野田1997:85)

“依然很好喝啊，这种啤酒”

僅かではあるが、「のだ」の文に対応する中国語を次のような形式にまとめられる。

[1] 無標識の文、「是……的(二)」、「是……(二)」(説明の「のだ」)

[2] 「是……的(二)」、「是……(二)」(強調の「のだ」)

[3] 应该、就会などの道理判断語気、推測判断語気(教示の「のだ」)

[4] 「要……」「想……」(決意の「のだ」)

[5] 「イントネーションで表す強い語気」(命令の「のだ」)

[6] 「啊」、「呀」などの感嘆詞が用いられることがある(想起、発見の「のだ」)

[7] 無標識の文(前置き、確認、換言、再認識等の「のだ」)

4-3 ムードの「のだ」と「是……的(二)」

現代漢語において、「是」は、「判断」を表す動詞であり、「我是学生」／「私は学生だ」という文では、中国語

の「是」と日本語の「だ」「である」とは同じようものである。朱徳熙(1982)が述べているように、動詞「是」は、「焦点化」の機能と「対比を表す」機能がある。しかし、これのみならず、「是」は肯定を強く押し出し、話し手の主体的態度を表明する語気副詞でもある。また、助詞「的」は、小野(2001)で述べた「モノ化機能」の他、よく文の末尾に置かれて、その確実さを強調する表現として肯定的な語気を表す。

本稿では、「是……的」の文を二つの型に分け、「是……的(一)」と「是……的(二)」と呼ぶ。「是……的(一)」は動詞の「是」と構造助詞「的」からなり、述語文にある動作がすでに実現、あるいは完成し、文の焦点は動作そのものではなく、動作についての時間、場所、方法、条件、目的、対象あるいは動作主などを強調する。4節で述べた「是……的」は「是……的(一)」の用法である。

「是……的(二)」は、語気副詞「是」と語気助詞「的」からなり、主に話し手が自分の主張、見解、態度などを表す場合に用いられ、主題に対して説明、強調、肯定の働きをする。「是……的(二)」は、話し手が事柄について、自分の判断、説明を述べる形のもので、これは「のだ」の解説、説明の文と同じように考えられるが、「のだ」と対応しないものが多い。「是」と「的」の間には動詞文あるいは形容詞文がくるのが普通であり、動詞文の動詞は能願動詞、可能動詞などである場合、「のだ」と対応することが多い。例えば、

(61) 新电影他总是要看的。／彼は新しい映画だったらいつも見るのです。

形容詞文の場合はあまり対応していない。例えば

(62) 我们的收获是很大的。／私たちの収穫は大きい。

「是……的(二)」の文では、「是」と「的」がほとんど省略でき、省略後の文の意味はあまり変わらないが、強調などの語気はなくなる。例えば、

(63) 我没错，我是正确的。

(李佩甫『羊的门』p.78)

私は間違っていない、正しかったのだ。

(永田小絵、辻康武(訳)『羊の門』p.99)

4-4 ムードの「のだ」と「是……(二)」

ムードの「のだ」のほとんどは「是」も「的」も用いない文になるが、説明の文には、「是」も「的」も用いない文以外に、「是……」の訳の例もみられる。強調の文には「是……的」の次に「是……」の訳が出てきた。本稿では、「是……」の文を二つの型に分け、「是……(一)」と「是……(二)」と呼ぶ。「是……(一)」は4節で述べたように、“是+N+V”構造をなすものと対比を表すものである。「是……(二)」は説明、強調を表すものである。

ムードの「のだ」と対応する「是……(二)」は、説明と強調を表し、省略することができる。省略しても、文は非文にならない。例えば、例(50)の「是_的、是_向右边走、一步一步地」の「是」は省略することができる。「是_的、向_右边走、一步一步地」という文になっても、文は非文にならないが、説明の語気がなくなる。

4-5 ムードの「のだ」と「是」も「的」も用いない文

中国語で、ムードは語気詞(語気助詞と感嘆詞)、語調(イントネーション)、語気を表す副詞、助動詞などによって表現される。教示の「のだ」文には、中国語の「应该」、「就会」などの道理判断語気、推測判断語気に対応することが多く、いきかせ、相手に認識してほしいという気持ちを表す。決意の「のだ」文には、中国語の方は「要……」「想……」などの意志・願望語気に対応することが多い。命令の「のだ」文の対応文には、特に決まった言葉はないが、文末に「。」あるいは感嘆符「！」が付与され、イントネーションで命令の語気を表す。想起の「のだ」文には、中国語の方は感嘆詞「啊」「呀」を用いて、分かったり、思い出したりしたことを表す。発見の「のだ」文にも、「啊」などの感嘆詞を用いて、驚きや感嘆を表す。前置き、確認、換言と再認識の用法は具体的な状況に応じて、文脈により統一されていない中国語の訳文になる。

5. 考察

5-1 「是……的(一)」、「是……的(二)」の区別と「のだ」の考察

5-1-1 文構成からの考察

まず、「是……的(一)」と「是……的(二)」の「是」と「的」の間の構成を見てみると、「是……的(一)」は動詞、あるいは主語と述語からなる。例えば、「是_{买的}的(買ったのだ)」「是_{我买的}的(私が買ったのだ)。「是……的(二)」は動詞文あるいは形容詞文からなるのである。例えば、「是_{要去的}的(行くのだ)」、「是_{正确的}的(正しいのだ)」「是」と「的」の間に同じ動詞が入る場合、「是……的(一)」が既然の動作であるのに対して、「是……的(二)」が能願動詞、可能動詞である。

また、「的」の位置について「是……的(一)」では目的語、対象語があれば「的」の後ろに置かれてもよい。例えば、「小王是_{昨天来的}的_{东京}(王さんが昨日東京に来たのだ)。「是……的(二)」では、説明、強調する内容は「是」と「的」の間に収めるが、文は常に「的」でおわる。例えば、「按_说、我_是一个字都不能_{说的}的(本来なら一言も言えないんです。)」

さらに、「是……的(一)」の「是」はほとんど省略できるが、「的」は必要で省略できない。「是」を省略しても文の意味は変わらない。例えば、「小王是_{昨天来的}的_{东京}」と「小王昨天来的_{东京}」の意味は変わらない。ただ、「是」を入れることによって、文の焦点「昨天」をマークすることができる。「是……的(二)」では、「是」と「的」と同時に省略することができ、省略後の文の意味はあまり変わらないが、強調などの語気はなくなる。

否定文のときは、「是……的(一)」は「是」の前に「不」をつけ、「不是……的」の形になる。例えば、「小王不是_{昨天来的}的_{东京}(王さんが昨日東京に来たのではない)」「是……的(二)」は「是」の後、「不是……的」の形になる。例えば、「按_说、我_是一个字都不能_{说的}的(本来なら一言も言えないんです。)」

5-1-2 意味、用法からの考察

「是……的(一)」の文は動作にかかわることの強調と指定であり、すでに実現したことが前提とされている特定の動作行為に対して、その動作行為に関与する何らかの関与項(動作者、受動者、地点、時点、道具、手段、受給者、共同者など)を基準に区分的限定を加え、当該動作(行為)の属性を措定しようとするのである。「是……的(二)」は事柄についての話し手の主張であり、説明、強調を表す。例えば、「小王不是_{昨天来的}的_{东京}」と「本来、我_是一个字都不能_{说的}的」の区別は、前者が動作を限定する「昨日」という時点を強調するが、後者は「说」という動作自体が実行できるかどうかを強調する。

5-1-3 「是……的(一)」、「是……的(二)」に対応する「のだ」についての考察

「是……的(一)」は、スコープの「のだ」と対応する。スコープの「のだ」は、構文的な必要があって用いられるもので、文の一部をフォーカスにするという機能を持っている。「是……的」も述語以外の要素を主張の焦点とする機能を持っている。この共通点があるが故に、スコープの「のだ」の一部が「是……的」と対応している。特別の文法構造を持つことと文の一部をフォーカスにする機能を持つことにより、スコープの「のだ」を使うとき文に特別の効果をもたらすことができる。

「是……的(二)」は、ムードの「のだ」と対応する。ムードの「のだ」は、文を名詞文に準じる形にすることによって、話し手の心の態度を表すものである。「是……的(二)」は話し手が事柄について、自分の判断、説明を述べる形のもので、これは、「のだ」の説明、強調の文と同じように考えられるので、ムードの「のだ」一部と対応している。「是……的(二)」と対応するムードの「のだ」

は、主に話し手が自分の主張、見解、態度などを表す場合に用いられ、主題に対して解説、説明、強調の働きをする。

5-2 「是……(一)」、「是……(二)」の区別と「のだ」の考察

5-2-1 文構成、性質からの考察

「是……(一)」と「是……(二)」は、文構成からみると似ているが、性質はかなり異なる。「是……(一)」の「是」は省略できないが、「是……(二)」の「是」は省略できる。「是……(一)」の「是」を省略したら、文は非文になる。例えば、例(43)の「我痛切感到，人不是屈服于环境或外力，而是被自己的内心一再的压垮」の「是」を省略したら、文は非文になる。「是……(一)」は、「是+N+V」構造と対比を表す機能があるから、「是」の省略はできないのである。

「是……(二)」の文では「是」はほとんど省略でき、省略後の文の意味はあまり変わらないが、強調などの語気はなくなる。この点は「是……(一)」とかなり異なる。

5-2-2 「是……(一)」、「是……(二)」と対応する「のだ」についての考察

「是……(一)」は、スコープの「のだ」と対応する。「是……(二)」はムードの「のだ」と対応する。「是……(一)」の文の一部をフォーカスにするという機能と「是」の省略できないという特徴は、スコープの「のだ」が構文的な必要があって用いられていることを明確に証明している。また、「是……(二)」の文の「是」の省略によってもたらされた文の語気の変化は、ムードの「のだ」を用いることと、用いないことによって文にもたらされた語気の変化と同工異曲である。「是……(一)」と「是……(二)」、「是……(一)」と「是……(二)」の分類は、スコープの「のだ」とムードの「のだ」と分類することに意義があることを示すことができた。

5-2-3 「是」も「的」も用いない文と「のだ」の考察

強調の「のだ」は、ほとんど「是……的」(二)と「是……」(二)に対応するが、他のムードの「のだ」のほとんどは「是」も「的」も用いない文になる。対応する文はそれぞれ異なるが、用法別に同じ特徴を持っている文がある。

教示、決意、命令、想起、発見の「のだ」文はそれぞれの語気を表す中国語になるが、説明、前置き、確認、換言と再認識などの用法は具体的な状況に応じて、文脈により統一されていない中国語の訳文になる。

おわりに

本稿ではスコープの「のだ」とムードの「のだ」と中国語の対応関係を解明してきた。その結果、次の四点が明らかになった。(イ)スコープの「のだ」と「是……的」が対応するとき、スコープの「のだ」は動詞文でなければならない。また、スコープの「のだ」の前接する部分は既成の事態でなければならない。(ロ)スコープの「のだ」の前接する部分が動詞の現在形、動詞の否定形、アスペクト接辞、様態を表す形容詞などであるとき、「是……」に対応する。(ハ)スコープの「のだ」と「是」も「的」も用いない文の対応は少ないが、日本語と中国語の品詞の違い、表現形式の違いと関わっている。後文脈と全文の雰囲気考慮したうえ、文の適切性、統一性を保つために、「是」も「的」も用いない文を選ぶこともある。(ニ)ムードの「のだ」はほとんど「是」も「的」も用いない文に対応するが、説明、強調、告白などの用法では、一部分が「是……的」と「是……」に対応し、同じ性質と機能を持っている。

スコープの「のだ」は構文的な必要があって用いられるもので、使うべきところで使わないと非文になる。初級の日本語学習者にとって、まず、非文にならないために構文上必要なスコープの「のだ」の用法を習得することが重要である。対応した結果を踏まえて、スコープの「のだ」とムードの「のだ」の分類を利用して、日本語学習者の初級を教えるよい方法を開発することができると思う。「のだ」の効果的な教授法の開発を今後の研究課題にする。

参考文献:

- 泉子・K・メイナード(1993)『会話分析』くろしお出版
 泉子・K・メイナード(1997)『談話分析の可能性:理論・方法・日本語の表現性』くろしお出版
 井上優(2003)「『のだ』文と“的”構文」『中国語学』2003 日本中国語学会
 内田聖二(1998)「『(の)だ』—関連性理論からの視点—」小西友七先生傘寿記念論文集 編集委員会編『小西友七先生傘寿記念論文集 現代英語の語法と文法』大修館書店 pp.243-251
 奥田靖雄(1990)「説明(その1) —のだ, のである, のです」『ことばの科学4』むぎ書房 pp.172-216
 大河内康憲(1975)「“是”のムード特性」『中国語の諸相』白帝社
 小野秀樹(2001)「“的”の「モノ化」機能—「照応」と“是

- ……的”文をめぐって-」『現代中国語研究』第3期 朋友書店
- 木村英樹(1982)「テンス・アスペクト：中国語」『講座日本語学11：外国語との対照研究Ⅱ』明治書院
- 木村英樹(2002)「“的”の機能拡張—事物限定から動作限定へ」『現代中国語研究』第4期 朋友書店
- 金田一春彦(1955)「日本語Ⅲ. 文法」市川三喜・服部四郎(編)『世界言語概説下巻』研究社
- 久野彰(1973)『日本文法研究』大修館書店
- 国広哲弥(1992)「『のだ』から『のに』・『ので』へ—『の』の共通性」『東京大学言語学論集'84』カッケンブッシュ寛子他編『日本語と日本語教育』名古屋大学出版会 pp.17-34
- 小金丸春美(1990b)「作文における「のだ」の誤用例分析」『日本語教育』71 日本語教育学会
- 近藤安月子(2002)「会話に現れる「ノダ」「談話連結語」の視点から」上田博人編『日本語学と日本語教育』東京大学出版会 pp.225-248
- 佐治圭三(1991)『日本語の文法の研究』ひつじ書房
- 朱德熙(1982)《语法讲义》商务印书馆
- 霜崎實(1981)「「ノデアル」考—テキストにおける結束性の考察—」
Sophia Linguistica7 上智大学 pp.116-124
- 杉村博文(1980)「「の」「のだ」と「是」「是……的」」『大阪外国語大学学报』49大阪外国語大学
- 杉村博文(1982)「「是……的」—中国語の「のだ」の文—」寺村秀夫ほか(編)『講座日本語学12：外国語との対照Ⅲ』明治書院
- 武内道子(1994)「関連性に関する制約—「のだ」をめぐって—」『ふじみ』16 富士見・言語文化研究会 pp.3-16
- 田中望(1980)「日常言語における“説明”について」『日本語と日本語教育』8 慶應義塾大学国際センター pp.49-64
- 田野村忠温(1990)『現代日本語の文法Ⅰ「のだ」の意味と用法』和泉選書
- 田野村忠温(1993)「「のだ」の機能」『日本語学』12-11 明治書院
- 坪根由香里(1994)「「もの」「こと」「の」に関する考察—「のだ」を中心に—」『南山日本語教育』創刊号 南山大学大学院外国語研究科 pp.99-128
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 名嶋義直(2007)『ノダの意味・機能—関連性理論の観点から—』くろしお出版
- 野田春美(1997)『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 林大(1964)「ダとナノダ」時枝誠記・遠藤嘉基監修 森岡健二他編『講座現代語6 口語文法の問題点』明治書院
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志(2007)『日本語モダリティ探求』くろしお出版
- 三上章(1953a)『現代語法序説シンタクスの試み』刀江書院(くろしお出版1972)
- 山口佳也(1975)「「のだ」の文について」『国文学研究』56 早稲田大学国文学会
- Alfonso, A. (1966)『Japanese Language Patterns vol.1』上智大学
- Chinami, K. (1989)“An Analysis of the Meaning and Usages of the S+No Desu Construction”,『英語学の視点』九州大学出版会 pp.319-350

Research on the Meaning and Usage of “NODA”: A Contrastive Study with Chinese Words Used in Translation

Fan Bilin

Chinese learners of Japanese have trouble in mastering “NODA”, due to its various meanings, usages and functions. There are many previous researches on “NODA”, but there are still few contrastive studies with Chinese. Therefore, this paper is intended to clarify the meaning and usage of “NODA” by contrasting with phrases similar to “NODA” that are used in Chinese. This paper uses a mass correspondence example from the novel of the side-by-side translation mainly on the daytime after the 70s as basic data. According to a classification of Noda (1997), this paper divides “NODA” into “NODA” of the scope and “NODA” of the mood and examines the correspondence with Chinese.